

なったのである。要するに湖上交通だけでは安土城の建設は説明できないのである。この点について、小林先生は足利先生の学説を引用し、坂本城や長浜城と「のろし」などの信号をやりとりすることが安土城建設の理由だとされている。第II部第3章の「甲賀武士と信楽」では、「過去には認識されていた地域名称の用例を検討することによって、過去には認識されていたにもかかわらず今日では見失われてしまっている地域的な実体を浮き彫りにする」という方法を用いて、「郡中惣そのものが、14世紀以来の歴史的過程を通じて（中略）甲賀上郡という領域を基盤として成立したものであった」と論証した。

第4章では、M.G.R.Conzenのプランユニット分析を援用し、鳥居前町の多賀・甲賀町の大原市場・甲南町の寺庄を事例として研究している。この章は「歴史的集落のプランユニット分析(1)」という1987年の論文に基づいている。(1)とあることから明らかなように、先生はこの方法を用いた多数の論文をおそらく準備されていたに違いない。本書の181頁では、プランユニットが整理されたあとに、その特色と意義が十分に解明されていないこと、ならびに建造物について検討できていないなどの不十分な諸点を列挙したあとで、今後の課題を明確にされている。われわれが、(2)以降の論文をもはや拝読できないことは実に残念なことである。

第III部では、大津・草津・栗東町・姉川上流の山村ならびに高島町の農業集落が対象とされている。地名からも明らかなように、湖南・湖北・湖西を取り上げている。大津に関して、古代から1970年代までの歴史地理が整理され、歴史的厚みを無視して都市を理解できないことが示されている。

第2章では、草津市の人口動態が詳細に検討され、市街地の拡大と住宅地開発が論じられている。近年のことがらに重点を置く都市地理学者とは異なり、野村・上笠地区におけるいわゆるミニ開発が袋小路化を回避できたのは、古代以来の条里制区画が今日まで維持されてきたことに求めている。

次に発足当時の栗東町に関して、その詳細な経緯がまとめられている。また姉川上流の山村に関して通婚圏・転出圏・買物圏などについて実に詳細な地域調査が行なわれている。特に、現在では使用できなくなった戸籍関係の資料を用いて、1925年から1936年までにおける集落内婚の多さや姉川上流域の山村が岐阜県揖斐郡の山村と結

びついていたことなどの諸事実が紹介されている。さらに、このころには中心集落の鍛冶屋集落との関わりが顕著であったが、燃料革命を経て長浜との関係が次第に強くなってきたことが論じられている。

高島町の農業集落に関する叙述では、1963年の近畿圏整備法に基づく計画が、農業や農村をまったく位置づけていないと手厳しく批判している。そして、「都市・農村間の所得格差に象徴される農村の停滞性を克服しようと努力している農民の姿を、滋賀県高島郡高島町宮野に事例を求めて述べて」いる。たしかにこの章は1960年代後半までの状況を述べているものである。とはいえ、地域計画に農村を位置づけることを主張されているように、行政に迎合するのではなく、批判的に正論を展開されている。産官学の連携が声高に叫ばれる昨今、先生の姿勢を通じて、毅然たることの重要性をあらためて痛感した次第である。

地域の研究はもはや地理学者の独占物ではないことは明らかである。であるだけに、われわれは地理学がいかに地域研究をおこなうべきかを再考すべきであろう。この点について、本書に表現された小林先生の地域観を通じて、後進のわれわれは大きな示唆を得ることができる。歴史地理学者はいうに及ばず、近江の環境と未来に関心を抱くすべての方々に熟読をおすすめしたい。

末尾ながら、小林健太郎先生のご冥福を衷心よりお祈りし、本書の紹介とさせていただきます。

(河島一仁)

石井 實著：

『地理の風景—古代から現代まで—』

大明堂 1999年9月 B5版 190頁

3,200円

私事で恐縮だが大学1年生のときに二人の先生から、授業で写真の撮り方について教わったことが、今でもフィールドワークや旅行にでかけて写真を撮るときの大事なノウハウとして大いに役立っている。一人は浮田典良先生で、「人文地理学IV(地理実習)」の授業で調査等に出かけて現地写真で写真を撮る際には、少なくとも遠・中・近の3つの距離から被写体を撮るべきことを教わった。お供した調査や巡検でも先生が同一の農業景観を様々な距離から何回もシャッターを押されていたことが強く印象に残っている。もう一人は藤木高嶺先生(当時、朝日新聞社)で、「文化人類学IV

「実習」の授業で実際に大学の周りで受講生が撮った写真を題材にして、被写体をファインダーを通してではなく自分の眼で見つめながらシャッターを押すべきことを何度も強調されたことが、子供の頃から写真が好きだっただけにとりわけ印象に残った。

本写真集は『地域を写す』（古今書院、1974）、『地と図』（朝倉書店、1989）に続く著者の3冊目の写真集で、1章から4章には古代・中世・近世の地図・絵図と近世の木版画に描かれた風景の現代の写真が絵図とともに掲載される。5章から10章には江戸・明治・大正・昭和の時代に撮られた写真と同地点から1990年代に大部分が撮影された著者の写真とが並列されて掲載され、1世紀から半世紀の間の地域の変容を写真を通して語らしている。本写真集の構成は以下の通りである。

1. 古地図のいまを写す
2. 中世絵図の世界を覗く
3. 近世河川絵図の表現
4. 江戸の風景
5. ベアドのまなざし—外国人のみた幕末の日本—
6. 『大日本地誌』の風景を探して
7. 『帝都と近郊』のいま
8. 三澤勝衛のフィールドを歩く
9. 『伊豆の漁村』から40年
10. 『写真地誌 日本』との対比

#### 解説

撮り歩き……あとがきに代えて

1章では8世紀に作成された「越前国足羽郡糞置村開田地圖」と大和国の「額田寺伽藍並條里圖」に、2章では「陸奥國骨寺村繪圖」「陸奥國骨寺村在家繪圖」「武藏國鶴見寺尾繪圖」に、3章では3枚は最上川を、1枚は富士川を描いた近世の河川絵図に描かれた風景を、当時の絵師がどの場所から描いたのかを厳密に特定したうえで、その場所からの撮影した写真を掲載している。4章では「利根川圖誌」と「江戸名所圖會」に木版画で描かれた風景について、やはり描いた場所から撮影した写真を掲載する。当時の絵師が風景を眺めて描いた場所を現地で特定するだけでも大変な労力を要する作業であるが、実際にその地点まで出かけて絵図を描いた絵師の絵筆のごとく写真を撮影された著者の熱意に対してはただただ拍手を送るしかないだろう。現在の風景は当時とは大きく変貌してしまっているのは当然としても、意外に地図・絵図に描かれた当時の風景の面影を現在の

風景の中に多く見いだすことができるのには、新鮮な驚きとときめきを覚えた。このときめきこそ、私たちが日々行っている歴史地理学研究的の景観分析の醍醐味に通じるものであろう。現代の風景は過去の風景と同じではないが、決して過去の風景と断絶しているのではなく、過去の風景は現代の風景のなかにひっそりと自己主張することもなく融けこみながら現代を支えていることを本書から教えられた。

5章以降では一転して江戸末期・明治・大正・昭和の時代に報道写真家やアマチュア写真家、地理学者・地理愛好家によって撮影され「地誌」などに掲載された各地域の風景写真と、それらが撮影されたのと同じ地点からの著者の撮影による写真とが並べられている。地域の時間的変容を表現するための定点撮影とことわられているが、それ以上に1枚の写真はあまりにも饒舌であり、そこに撮影者の風景へのこだわりが全面的に主張されたすぐれて主観的な表現の産物である。掲載されたそれぞれの写真から時代時代の風景へのまなざしの変化を撮影者の写真表現から感じ取ることができる。そして掲載された過去の写真から、それらを選ぶうえでの著者の今は遠き撮影者の風景へのまなざしに対する共感も伝わってくる。現代と違ってカメラが非常に高価なうえに重くかさばる時代の作品だけに、シャッターを切る瞬間は常に真剣勝負であり1枚1枚の写真には撮影者の風景を見つめとらえる熱き思いが込められている。それはまた著者自身の写真にも共通するこだわりである。鋭い感性をもつ著者の風景への主観的ではあるが優しいまなざしと、全神経を集中させてシャッターを押す一瞬に凝縮して表現された著者のメッセージを、1枚1枚の写真から私たちは真剣に受け取らねばならない。さらに決して「景観」とはいわず「風景」という言葉にこだわる著者の思いも掲載された写真から読みとるべきであろう。

余談になるが、この原稿を抱えているときに朝霞市博物館で「川と人々のくらし」展を観た。荒川の河川絵図の展示とともに、三代の歌川広重が描いた「名所江戸百景」「江戸名勝図絵」「東京真景図絵」中の河川にちなむ錦絵とそこに描かれた風景を撮った現代の写真とが並べて展示されていたのが興味深かった。しかし惜しむらくは錦絵を描いた場所から撮られた定点写真ではないことであつた。著者が写真を担当されていたら当時の川と人々との関わりを錦絵を通して描こうという展

示のねらいがもっと生かされたのではと思った。

以上拙い紹介ではあったが、本写真集はデジタル万能の現代において、古武士のこだわりを断固と主張する著者の思いが込められた作品である。本書は「地理写真集」という狭いジャンルには押し込められない立派な写真芸術であると同時に、やはり私たちの地理学の一つの到達点となる優れた研究成果であることはいうまでもないだろう。

何度でも撮り直しができる高性能化したデジタルカメラを調査研究の武器に使える若い世代の地理研究者に本書を手にとってもらい、常に一期一会の覚悟でシャッターを押して1枚1枚の写真を撮る著者の写真撮影への厳しい姿勢をそこからぜひ学んでもらいたい。

(林 和生)